

集団裏切りと崩壊の予兆



79.9.8

No. 219

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二五八・九・公衆電話(22)七二〇七

「防衛されるのはイヤ、本部」とは話さない (乗務員・佐藤)

「本部」反動集団の御都合主義のおかげで全国大会に狩り出された、なげなしの密通裏切り分子の今日は、職場からわきあがる糾弾・追及にさらされ、すっかり意気消沈、風前のともしび同然、グラグラである。「個人的不満・私怨」が原因で「労働千葉に敵対しよう」という新小岩の裏切り分子や「労運研と組んで労働改革をやるために労働『本部』に残る」などというトンチンカンな銚子・佐倉の裏切り分子のことは、ここではさておき、生粋の革マル潜入分子島田らをかき出しての津田沼における「本部」派支部結成策動を粉砕する闘いは、増々大きく爆発しつつある。

マル生分子顔まけの悪らつ反動分子＝島田 (革マル) が完全に孤立！ 津田沼検修職場

遂にバケの皮をはがされ、革マルの本性むき出して居なお、当局と「本部」防衛隊と手を組んで、検修職場の反動的しめつけの先兵を買って出た島田に対する職場の怒りは実にすさまじい。

島田は職場の仲間の当然の糾弾に耐え切れず、「出・退勤の点呼」以外は職場に一時たりとも身を置かず、一日中付近の喫茶店や空電車の中などに逃げかくれているありさまであり、日に日に孤立を深めている。

「防衛隊」をふり切り逃げ出す佐藤 九月二日(日)津田沼乗務員詰所

九月二日は、日曜日だというのに「防衛」隊六五名が津田沼に押しかけてきた。(詰所に藤井・尾形中執ら二五名、のこり四〇名は玄関前待機)裏切り者・佐藤の乗務終了だ。例によって駅の方から異様な「集団」が歩いてくる。カバンを持った佐藤の周りを八名の「本部」反動集団がダンゴ状にとり囲み、その後を局派遣の「白腕章」防衛隊が各三名ずつピッタリつき添って区庁舎玄関に近づいてくる。

職場の仲間の冷笑や怒りの声があびせられる。佐藤はすつと下をむいたきり顔が上げられない。二階乗務員詰所で居あわせた支部役員・組合員の前で立ちすくむ。

片岡津田沼支部長「佐藤君、毎日毎日こんなにとりまかれて仕事していて気がいいかい？」

佐藤「いや全然気分よくないです。皆からも色々言われますし、自分もこんなのはイヤです。「本部」の人にはやめてくれと何度か言ったのに聞いてくれなかった。津田沼の人間としてこんな迷惑をかけてしまっただけだ」と思っています。

支部長「君が本心からそう思っているのなら、彼らの前ではっきりそう言うべきだ」

佐藤「はい……そう言います」

と、つかつかと「本部」の連中の前に進み出て顔を上げて何かを言おうとしたとたん、すこし離れてこのやりとりを聞いていた藤井は驚いて立ち上がり、かけより、

藤井中執「まっ、まっ、ま……佐藤君！ ここでは何だから外でじっくり話そう……」

と、あわてて佐藤がしゃべるのを制止する。若干のおし問答の末、結局、「とにかく外で話そう」といって、二五名がダンゴ状に佐藤をとりかこんで、むりやりつれ出していった。

玄関の外で、大声で、藤井「佐藤さん、本部の方針もあることだし……」

佐藤「いや、もう話したことはない。俺は一分でも早く家に帰りたいんだ！」というが早いか、「防衛」隊の囲みをふり切って、ダッと駆け出して逃げ出す。

藤井「おい！おい！ 佐藤君！……」 「本部」オルグ団があわてて五・六歩追いつがるのをふり切って、佐藤は後も見ずに一目散に駅の方に駆け出して一人で帰って行ってしまった。ガックリ肩を落す「防衛」隊。

あいまいさ残さず、徹底追及を！

何の正義性もなく、路線も展望もない、ただ、おごり高ぶった反労働者の暴力のみに支えられた「本部」オルグ団や、卑劣な裏切り分子が労働千葉のみならず、国鉄千葉の職場の怒りをかきたてている。更に、裏切り分子糾弾、労働千葉の闘う団結をうち固め前進しよう。

